

高島 「限界突破」

2019年夏の東東京大会ベスト8 限界の一步先へ、都立のチャレンジ

都立実力校・高島は2019年夏の東東京大会ベスト8など確かな実績を残す。今秋からは新たな指導体制でさらなる高みを目指していく。

■過去5年で都立トップレベルの成績

高島は、過去5年の東東京大会で都立トップレベルの結果を残してきた。島修司前監督(現田無監督)が指揮した2018年にベスト16、2019年にベスト8。菊池明彦監督となった2021年は4回戦進出。そして2022年も力強い戦いをみせた。2回戦で両国、3回戦で大東大、4回戦で芝に勝利し5回戦へ。ベスト8進出をかけた戦いでは日体大荏原と対戦。初回に3点を奪うなど主導権を握る戦いへ持ち込ん

だが、ゲーム中盤に逆転を許して5対6で屈した。ベスト8入りは逃したが、堂々のベスト16。毎年、選手が入れ替わる中、一丸となった戦いによって安定した戦績をつかみ取ってきた。

■目標は「甲子園で1勝」

夏大会後、2シーズンを指揮した菊池監督が家庭の事情などもあり交代。篠崎時代の同僚で、同校を2015年夏東東京大会ベスト4へ導いた牛久保和哉監督がチームのタスキを受け取った。責任教師としてチームを支えていく菊池前監督は「2年間良い経験をさせてもらったので牛久保監督をサポートしていく」と監督時代同様にグラウンドに立つ。牛久保監督は、篠崎ベスト4の成功体験を基に、高島で甲子園出

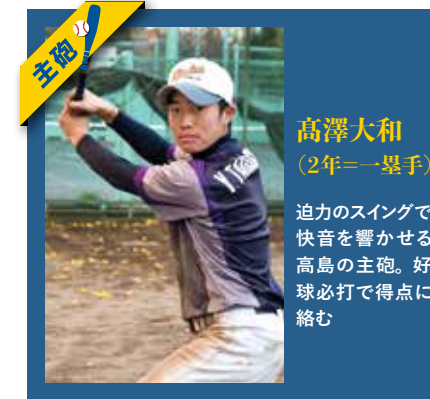
場を目指す。高校時代に日比谷で甲子園を目指した指揮官は「都立で甲子園に出場して1勝を上げるのが私の大きな目標です。篠崎では、やれば出来ることを選手たちが証明してくれた。高島のスタイルを引き継いで、やるからには生徒とともに甲子園を目指す」と静かな闘志を燃やす。

■春・夏の飛躍を誓って冬の強化

2023年の高島は、佐藤渚生主将(2年=内野手)がチームをまとめていく。投手の軸は、昨夏の東東京大会を経験した右サイドスローのエース佐山侑唯斗(2年)。佐山がゲームを作って、3番・佐藤主将、主砲・高澤大和(2年=内野手)の打撃陣がチャンスで役割を果たす。守備では、守備エリアの広い大高春樹(2年=外野



佐山侑唯斗(2年)
昨夏からマウンド上がる右サイドのエース。内と外を使い分ける投球で試合を作る



高澤大和(2年=一塁手)
迫力のスイングで快音を響かせる高島の主砲。好球必打で得点に絡む



大高春樹(2年=中堅手)
俊足巧打のセンター。膝の手術で秋が不出場、春・夏にすべてをかける

手)、1年生ショートstopper大木裕央らが堅実の守りをみせていく。秋大会は予選で実力校日本ウェルネスと対戦して2対3で惜敗し、都大会出場はならなかった。選手たちはあの悔しさを胸に秘めて冬の強化練習、そして強化合宿を乗り切った。ひと回り大きく成長した選手たちは、春・夏の飛躍を誓って新たな年を迎えた。限界を突破した先に甲子園へ見えてくる。

高島高校

【住所】東京都板橋区高島平3-7-1
【創立】1974年 【甲子園歴】なし
野球部は開校の翌年に創部され、2012年秋には都大会ベスト8入り。21世紀枠候補に推薦された。卒業生に山口香(ソウル五輪女子柔道銅メダリスト)など。2019年夏ベスト8。



高島・牛久保和哉監督 限界の一步先へ

「篠崎ではベスト4を経験しましたが、都立でも戦えることを生徒たちが示してくれました。高島の選手たちは高い能力があります。ただ、自分たちで限界を決めてしまいがちなので、限界の一步先へ進んでほしい。そうすれば世界が変わってくると考えています」

1983年東京都生まれ。日比谷高―東京学芸大。現役時代は外野手で、大学時代は主将を務めた。大学卒業後に特別支援学校を経て指導者へ着任。2015年夏の東東京大会ベスト4。2022年4月に高島へ異動となり同年秋から監督。

